1時間の道徳の授業の中で一人ひとりが考えてきたことを大切にしたい

1　はじめに

先日（2019年12月4日）、ある中学校の校長先生から道徳の授業について話を伺いました。私が考えてきた授業展開とは随分と違っていました。改めて、道徳の授業について考えたいと思いました。

2　めざしている道徳の授業　（その1）

校長先生から伺った話を自分なりにまとめてみました。次の通りです。

【めざすしている道徳の授業】

A:資料から道徳的価値について考える。

B:自分の生き方から道徳的価値について考える。

C:Bについて交流する。

しかし、Aで深く考えないとBが表面的なってしまう。また、指導案にCを入れると、Cの時間を確保するために、Aがおざなりなり深く考えることができない。以上のことから、まずは「自分の生き方と絡めながら資料から深く道徳的価値について考えさせる」ことをめざしたい。

資料を読んで深く考えさせるには相応の時間が必要である。一時間の授業を見ると資料の読み取りをずっとしているように見られるかもしれない。

3　提案授業

校長先生の話を伺った翌週に提案授業がありました。参観させていただくことができました。その時の指導案と私の感想です。

(1)　指導案より

2019年12月11日　　第5校時　第3学年　道徳

①　主題名　　「家族愛」　内容項目C－(14)

父母、祖父母を敬愛し、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くこと

②　題　材　　「一冊のノート」

③　ねらい　　祖母の思いを知った主人公の気持ちを考えることで、家族を敬愛し、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築こうとする道徳的態度を育てる

④　評　価　　祖母や主人公の気持ちを考えることで、自分の家族に思いを馳せる発言や記述、道徳的態度が見られたか

⑤　学習指導過程

導入	(5分)	導入時の発問
展開①	(15分)	初発問
展開②	(20分)	補助発問①、補助発問②、中心発問
終末	(5分)	感想を書く

(2)　授業を参観しての感想

①本時のねらいにせまるために

※指導案にある「ねらい」「評価」「学習指導過程」は一体化しているはずです。評価には「自分の家族に思いを馳せる発言や記述、道徳的態度が見られたか。」とありますが、自分の家族に思いを馳せるような発言や記述をする活動は終末の6分間だけでした。「ねらい」にせまるための、そして、「評価」ができるようにするためには、活動時間や手立てがもっと必要ではないでしょうか。

※授業終末の感想を書かせる場面で、教師から「今日の授業で、自分の家族について考えるきっかけとなったと思います。自分の発見、自分の気づきが大切です。家族について学んだことを書

きましょう。」という説明の後、各自がワークシートに記述しました。自分の家族に思いを馳せるために、この指示はもっと熱い思いをこめて伝えるべきではなかったでしょうか。さらっと流れていってしまった。流してしまった。

〇ワークシートに何人が自分の家族について思いを馳せ、記述しているか気になるところです。

※中心発問の前に補助発問があるように、感想を書く場面の前に補助発問を入れてはどうでしょうか。例えば、「家族の誰かが、家族のことを真剣に考えてくれているなぁとか、家族のことをいつも考えてくれているなぁとか感じるような場面は、これまでにありませんでしたか。」など

②めざしている道徳の授業にかかわって

校長先生から伺っためざしている道徳の授業は、「自分の生き方と絡めながら資料から深く道徳的価値について考えさせる」でした。

〇そうであるならば、道徳の授業では必ず、資料を読む前に、「自分の生き方ともからめながら、資料について考えよう。」と伝えるべきです。毎時間、言い続けることで、できるようになってくると考えます。

※そして、本時の感想では、本時でテーマにしている道徳的価値について、自分の生き方を振り返るような補助発問をして、感想を書かせてはいかがでしょうか。

③主体的・対話的で深い学びに向けて　　－略－

④その他、気になること　　－略－

4　めざしている道徳の授業　（その2）

授業を終えて校長先生から再び話を伺う機会がありました。その内容をまとめました。

自分の生き方と絡めながら、資料から道徳的価値について考えさせたい。しかし、終末の感想で、自分の生活を振り返って今日の授業の感想を書きなさいとは言わない。例えば、「家族愛」を主題とした授業を展開したとき、授業の終末で「家族の誰かが家族のことを真剣に考えてくれているなぁなどと感じる場面はこれまでにありませんでしたか。」といった補助発問はしない。指示としては、「学んだことを書こう」である。なぜなら、教師が補助発問をすると、授業の中でずっと考えてきたことではなく、教師の補助発問に引っ張られ、その内容を書くことになる。そうなれば、表面的な内容しか書かない危険性が高くなる。主題にかかわる資料を読む中で、自分の生き方に照らして考えているはず。本人が授業の中で考えてきたことについて書かせたい。

教師は生徒の感想を読んで、自分の体験・経験を踏まえた記述には下線を、他の人の意見等に触れている記述には波線を、自分の考えの変化やこれからの生き方に触れている記述には二重下線を引く。これにより、生徒は何を書けば良いのか、何を評価されているかを知り、次の感想に活かす。または、あらかじめ、このことを生徒に知らせておくこともある。

資料の内容や友だちの発言にかかわって、本時の主題ではないところにひっかかり、そのことでずっと考えていくことがあってもよい。子どもが引っかかったところで、深く考えたところで感想を書かせたい。

5　校長先生の話を聞いて提案授業を振り返る

「3(2)**授業を参観しての感想**」の「**①本時のねらいにせまるために**」と「**②めざしている道徳の授業にかかわって**」の記述では、〇と※の記号で使い分けがしてあります。※については校長先生がめざしている道徳とはずれているということです。提案授業は校長先生がめざしている道徳に沿って授業が進められていたということです。

6　めざしている道徳の授業

校長先生の話を伺い、めざしている道徳の授業についてまとめてみました。

「自分の生き方を絡めながら資料を読み取り、道徳的価値について意見を交流する。そんな中で、自分がずっと考えてきたこと（自分がこだわって考えてきたこと）を、終末の感想に書く。」ということでしょうか。

7　おわりに

校長先生の話を2回伺い、提案授業を見せていただいて、めざしている道徳の授業がよく分かりました。これまで自分が考えてきた道徳の授業を見つめ直すきっかけとなりました。資料から道徳的価値を深く考えさせるためには発問を繰り返ことが必要です。そうなれば時間もかかりるということです。